- M先生
- H大　姉崎です。
- 思いがけず、『Ｂ高校５０年誌』をお送り頂きありがとうございました。
- 僕は、１９６６年入学、６９年卒業です。１９６３年に、父の転勤でＴ県Ｆ町の自然の豊かな田舎の港町から、Ｎ市のM町に引っ越し。伊勢湾台風の傷跡が残るＮ市周縁地区で、工場の煤煙と大型トラックが行き交う地域に降りたち環境の落差に戸惑いました。
- 転校したＮ中学は、学力底辺校で、労働者の町の学校でした。そこで良心的な教師達や「在日」の同級生Ｓと出会い、僕も社会意識に目覚めたことを思い出します。高校は、何故か友達の多くが進学したＺ高校や親友達の選んだＡ高校に行かず、天の邪鬼で工場地帯のＢ高校に行きました。
- Ｂ高校は管理的で、嫌な教師がいたり、友人達の会話もつまらなく、父が引き起こしたことでの家庭事情のこともあり、暗い思いで、僕は孤独な青年前期を過ごしました。
- 出会えて良かった教師は、3 人。
- 国語のM先生。源氏物語の深い造詣と生徒を見つめるまなざしが優しかった。
- 数学のＩ教頭。保守的な方だと思うが、偏見無く生徒を愛していた。
- 物理のＴ先生。僕の大学時代に理学部助手に兄の方もいたが、物理はこんなに明晰に世界を理解できるのかと思った。
- 大学４年時に教育実習に来て、若手の方々にいろんなことを教えて頂いたのが懐かしい思い出です。
- 教育実習で教えた生徒の中に、現在Ｃ大のＯさん（食物学）がいて、ある研究会でなつかしそうに僕の「授業」の感想を話されたことがありました。
- 僕は、大学院に進学し、大学教員の道を選び、高校教師にはならなかったのですが、Ｂ高校時代は、いろんな意味でほろ苦いなつかしさがあります。
- 今回、『５０年誌』をお送り頂き、なつかしく、つい余分なことも書きました。M先生もＢ高校で多くの若者を育てて来られたことと拝察致します。これからもお元気に。